

鈴木大慈

e-mail: taiji@mist.i.u-tokyo.ac.jp

問 1 必ずしも滑らかとは限らない凸関数を (劣) 勾配法で最小化するとき, 定数ステップサイズを用いてしまうと収束しない例を作れ.

Definition 1 ある凸関数 $f: \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R} \cup \{\infty\}$ の凸共役関数 (Legendre 変換) は $f^*(y) = \sup_{x \in \mathbb{R}^d} \{x^\top y - f(x)\}$ ($y \in \mathbb{R}^d$) で定義される.

問 2 $f(x) = f^*(x)$ ($\forall x \in \mathbb{R}^d$) となる凸関数を求めよ. これは一意に定まるか?

問 3 $V = \{1, \dots, d\}$ とする. 非負集合関数 $F: 2^V \rightarrow \mathbb{R}_+ \cup \{\infty\}^{*1}$ で, $F(\emptyset) = 0$, $F(A) > 0$ ($\forall A \subset V, A \neq \emptyset$) を満たすものを考える. $p \geq 1$ として, $q \geq 1$ を $\frac{1}{p} + \frac{1}{q} = 1$ を満たすものとする. インデックス集合 $A \subset V$ に対して, $s \in \mathbb{R}^d$ の A への制限 $s_A \in \mathbb{R}^d$ を $s_{A,i} = 0$ ($i \notin A$), $s_{A,i} = s_i$ ($i \in A$) とする. また, $s(A) := \sum_{i \in A} s_i$ とする. 集合関数 F に対して, \mathbb{R}^d 上のノルム Ω_p とその双対ノルム Ω_p^\bullet を以下のように定める [3]:

$$\Omega_p^\bullet(s) := \max_{A \subset V, A \neq \emptyset} \frac{\|s_A\|_q}{F(A)^{1/q}} \quad (s \in \mathbb{R}^d),$$

$$\Omega_p(w) := \sup\{w^\top s \mid s \in \mathbb{R}^d, \Omega_p^\bullet(s) \leq 1\} \quad (w \in \mathbb{R}^d).$$

- (i) $\Theta(w) := F(\text{supp}(w))^{1/q} \|w\|_p$ としたとき, Ω_p は Θ の凸包であることを示せ. つまり, $\Theta^{**} = \Omega_p$ であることを示せ.
- (ii) $F(A) = |A|$ に対して, Ω_p を求めよ.
- (iii) $F_-(A) = \max\{s(A) \mid s \in \mathbb{R}_+^d, s(B) \leq F(B) (\forall B \subset V)\}$ とする. $\Omega_p^F = \Omega_p^{F_-}$ を示せ (なお, Ω_p^F は集合関数 F に対応するノルム Ω_p である).
- (iv) $\Omega_p(w) = \min_{\eta \in \mathbb{R}_+^d} \sum_{i \in V} \frac{1}{p} \frac{|w_i|^p}{\eta_i^{p-1}} + \frac{1}{q} \Omega_\infty(\eta)$ であることを示せ (ヒント: $|a|^{1/q} |w| = \min_{\eta \in \mathbb{R}_+} \frac{1}{p} \frac{|w|^p}{\eta^{p-1}} + \frac{1}{q} \eta |a|$ ($a \in \mathbb{R}, w \in \mathbb{R}$)). これより, 近接写像が

$$\min_{w \in \mathbb{R}^d} \frac{1}{2} \|x - w\|^2 + \lambda \Omega_2(w) = \frac{\lambda}{2} \min_{\eta \in \mathbb{R}_+^d} \left(\sum_{i \in V} \frac{x_i^2}{\eta_i + \lambda} + \Omega_\infty(\eta) \right)$$

で与えられることを示せ.

*1 $\mathbb{R}_+ := \{x \in \mathbb{R} \mid x \geq 0\}$

(v) $d_i > 0$ ($i \in V$) に対して, $F(A) = \sum_{i=1}^{\max(A)} d_i$ とする. このとき,

$$\Omega_2(w) = \min_{\eta \in \mathbb{R}_+^d} \left\{ \frac{1}{2} \sum_{i \in V} \left[\frac{w_i^2}{\eta_i} + \eta_i d_i \right] \mid \eta_i \leq \eta_{i-1} \ (\forall i) \right\}$$

を示せ (wedge penalty と呼ばれる).

(vi) F が単調劣モジュラ関数のとき, その Lovász 拡張と Ω_∞ との関係を考えてよ.

問 4 $a_1, \dots, a_n > 0, \alpha, \beta > 0$ とする. 次の最適化問題の解を求めよ:

$$\min_x \left\{ \sum_{i=1}^n \frac{a_i}{x_i^\alpha} \mid x_i > 0, \sum_{i=1}^n x_i^\beta \leq 1 \right\}.$$

問 5 γ -平滑でかつ μ -強凸関数を Nesterov の加速法のリスタート法を用いて最適化する. このとき, $f(x_t) - f(x^*) = O(\exp(-t\sqrt{\mu/\gamma}))$ を示せ. なお, 講義中で紹介した γ -平滑な凸関数における加速法の収束レートは用いて良い.

Theorem 2 (Fenchel の双対定理 (特殊ケース)) $f: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ と $g: \mathbb{R}^m \rightarrow \mathbb{R}$ を閉凸関数とする. $A \in \mathbb{R}^{n \times m}$ とする. このとき, 以下が成り立つ:

$$\inf_{x \in \mathbb{R}^m} \{f(Ax) + g(x)\} = - \inf_{y \in \mathbb{R}^n} \{f^*(y) + g^*(-A^\top y)\}.$$

問 6 $(x_i, y_i)_{i=1}^n \in \mathbb{R}^n \times \{\pm 1\}$ なる訓練データ (二値判別問題 ($y_i \in \{\pm 1\}$)) が与えられているとして, 以下の Support Vector Machine (SVM) の学習問題を考える:

$$\inf_{\alpha \in \mathbb{R}^n} \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n \max \left\{ 0, 1 - \sum_{j=1}^n \alpha_j k(x_i, x_j) y_i \right\} + \frac{\lambda}{2} \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n k(x_i, x_j) \alpha_i \alpha_j.$$

ただし, $k: \mathbb{R}^d \times \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$ はカーネル関数とする. Fenchel の双対定理より, この問題の双対問題を導出せよ. (ここでは簡単のためバイアス項を抜かしているが, 余裕があればバイアス項有りの双対問題も導出されたい. つまり, $(\sum_j \alpha_j k(x_i, x_j)) y_i$ の項を $(\sum_j \alpha_j k(x_i, x_j) + b) y_i$ に修正して, $b \in \mathbb{R}$ についても最適化する問題を考える)

Theorem 3 (Knott-Smith optimality criterion, Brenier's theorem) W_2 - 距離は以下のように定義される:

$$W_2(\mu, \nu) := \sqrt{\inf_{\pi \in \Pi(\mu, \nu)} \int (x - y)^2 d\pi(x, y)}. \quad (1)$$

ここで, μ, ν は \mathbb{R}^d 上の (Borel) 確率測度でともに二次モーメントが有界であるとし, Π は周辺分布が μ および ν である $\mathbb{R}^d \times \mathbb{R}^d$ 上の確率測度全体の集合である. 今, μ, ν がルベーグ測度に関して絶対連続な確率測度であるなら, 式 (1) の inf を達成する π が存在し, π が最適解であることの必要十分条件は, ある真閉凸関数 φ が存在して, π -a.s. で $y \in \partial\varphi(x)$ が成

り立つことである。すなわち、最適解は $\pi(x, y) = (\text{Id} \times \nabla\varphi)_\# \mu$ で与えられる*2。なお、この写像 $T = \nabla\varphi$ は以下の最適輸送問題の μ -a.s. で一意な解である：

$$\inf_{T: T_\# \mu = \nu} \int_{\mathbb{R}^d} \|x - T(x)\|^2 d\mu(x) = W_2(\mu, \nu)^2.$$

(詳細は [5] を参照されたい)。

問 7 $\mu_1, \mu_2 \in \mathbb{R}^d$ かつ、 $\Sigma_1, \Sigma_2 \in \mathbb{R}^{d \times d}$ をともに正定値対象行列とする。二つの正規分布 $N(\mu_1, \Sigma_1), N(\mu_2, \Sigma_2)$ の間の W_2 -距離を求めよ。(直接導出することも可能 [1, 4]).

Remark 4 (Ω, \mathcal{F}) を確率空間、 $(\mathcal{F}_t)_{t \geq 0}$ をその上のをフィルトレーションとする。確率微分方程式

$$dX_t = b(X_t)dt + \sigma(X_t)dW_t$$

を考える。ただし、 $W = \{W_t\}_t$ は \mathcal{F}_t -適当な \mathbb{R}^d -値ブラウン運動で、 $b: \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}^d$ 、 $\sigma: \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}^{d \times d}$ はともに (十分滑らかな) ボレル可測関数である。この確率微分方程式に対し、無限小生成作用素 \mathcal{A} は

$$\lim_{t \searrow 0} \frac{1}{t} [\mathbb{E}[f(X_t) | X_0 = x] - f(x)] = (\mathcal{A}f)(x) \quad (x \in \mathbb{R}^d)$$

で与えられる ($f \in C^2(\mathbb{R}^d)$)。実は、 $A(x) = \sigma(x)^\top \sigma(x)$ を用いて、 $\mathcal{A}f(x) = \frac{1}{2} \sum_{i,j=1}^d A_{ij}(x) \frac{\partial^2 f(x)}{\partial x_i \partial x_j} + \sum_{i=1}^d b_i(x) \frac{\partial f(x)}{\partial x_i}$ と表せることが知られている。このとき、状態遷移確率 $P(X_t \in dy | X_0 = x) = \Gamma(t; xy)dy$ に対し、前進 Kolmogorov の方程式 (前進 Fokker-Planck 方程式)

$$\frac{\partial}{\partial t} \Gamma(t; x, y) = \mathcal{A}^* \Gamma(t; x, y) \quad ((t, y) \in (0, \infty) \times \mathbb{R}^d),$$

および、後退 Kolmogorov の方程式 (後退 Fokker-Planck 方程式)

$$\frac{\partial}{\partial t} \Gamma(t; x, y) = \mathcal{A} \Gamma(t; x, y) \quad ((t, x) \in (0, \infty) \times \mathbb{R}^d),$$

が満たされることが知られている [2]。なお、 $\mathcal{A}^* f(y) = \frac{1}{2} \sum_{i,j=1}^d \frac{\partial^2}{\partial y_i \partial y_j} [A_{ij}(y)f(y)] - \sum_{i=1}^d \frac{\partial}{\partial y_i} [b_i(y)f(y)]$ である。

(参考) 伊藤の公式： $f: \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$ が二回微分可能なとき、

$$df(X_t) = \nabla^\top f(X_t)(b(X_t)dt + \sigma(X_t)dB_t) + \frac{1}{2} \sum_{i,j=1}^d \frac{\partial^2 f(X_t)}{\partial x_i \partial x_j} A_{i,j}(X_t)dt.$$

問 8 Kolmogorov の方程式から連続時間勾配ランジュバン力学の不変測度 (定常分布) π_∞ を求めよ。ただし、その存在および一意性、不変測度への収束は仮定してよい。

*2 $\nabla\varphi$ は必ずしも存在しないが、 μ -a.s. で well-defined であることが知られている [5]。

問 9 連続時間勾配ランジュバン力学の不変測度 π_∞ が対数 Sobolev 不等式を満たすとき, X_t の分布 ρ_t と π_t との相対エントロピー $D(\rho_t|\pi_\infty)$ の線形収束を示せ. (ρ_t は π_∞ に対して絶対連続であるとして良い. また, 細かい正則条件は検証しないで良い)

問 10 (optional) あるベクトル $a = (a_i)_i$ に対し, $\|a\|_p := (\sum_i |a_i|^p)^{1/p}$ ($1 \leq p < \infty$), $\|a\|_\infty := \max_i |a_i|$ とする. $(\sigma_i)_{i=1}^n$ を i.i.d. の Rademacher 確率変数とする; $P(\sigma_i = 1) = P(\sigma_i = -1) = 1/2$. また, $(x_i)_{i=1}^n$ は i.i.d. である確率分布から生成される確率変数であるとして, $\|x_i\|_\infty < 1$ (a.s.) を満たすものとする. ある関数クラス \mathcal{F} の Rademacher 複雑度は

$$R_n(\mathcal{F}) = \mathbb{E}_{(x_i)_{i=1}^n, (\sigma_i)_{i=1}^n} \left[\sup_{f \in \mathcal{F}} \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n \sigma_i f(x_i) \right].$$

で定義される. このとき, 二層ニューラルネットワークの集合 \mathcal{F} の Rademacher 複雑度を上から評価せよ:

$$\mathcal{F} = \left\{ \sum_{j=1}^M a_j \eta(w_j^\top x) \mid a_j \in \mathbb{R}, w_j \in \mathbb{R}^d, \max_{1 \leq j \leq M} \|w_j\|_p \leq C_1, \|a\|_q \leq C_2 \right\}.$$

ただし, $1 \leq p, q \leq \infty$ かつ $\eta(u) = \max\{u, 0\}$ とする. なお, 1-Lipschitz 連続な関数 g に対して, $g \circ \mathcal{F} = \{g \circ f \mid f \in \mathcal{F}\}$ と書くとき, $R_n(g \circ \mathcal{F}) \leq R_n(\mathcal{F})$ が満たされることは使っても良い.

参考文献

- [1] D. Dowson and B. Landau. The fréchet distance between multivariate normal distributions. *Journal of multivariate analysis*, 12(3):450–455, 1982.
- [2] I. Karatzas and S. E. Shreve. *Brownian Motion and Stochastic Calculus, Second Edition*. Springer-Verlag New York, 1998.
- [3] G. Obozinski and F. Bach. A unified perspective on convex structured sparsity: Hierarchical, symmetric, submodular norms and beyond. Preprint: hal-01412385, 2016.
- [4] I. Olkin and F. Pukelsheim. The distance between two random vectors with given dispersion matrices. *Linear Algebra and its Applications*, 48:257–263, 1982.
- [5] C. Villani. *Topics in Optimal Transportation*. Graduate studies in mathematics. American Mathematical Society, 2003.